



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	『伊勢物語』誤写の論 : 第七十七段の場合
Author(s)	後藤, 康文
Citation	国語国文研究, 103, 1-9
Issue Date	1996-05-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94838
Type	journal article
File Information	kokugokokubunkenkyu_103_01-09.pdf



『伊勢物語』 誤写の論

第七十七段の場合

後 藤 康 文

一

『伊勢物語』（天福本）第七十七段は、文徳天皇の女御多賀幾子の法要が山科の安祥寺で営まれたその日、「右の馬の頭なりける翁」が「春の別れ」の歌を奉ったという、あの章段である。

むかしむらのみかとゝ申すみかとおはしましけりその時の女御たかきこと申すみまそかりけりせうせたまひて安祥寺にてみわさしけり人くさくけものたてまつりけりたてまつりあつめたる物ちさくけ許ありそこはくのさくけものを木のえたにつけてたうのまへにたてたれば山もさらにたうのまへにうこきいてたるやうになん見えけるそれを右大将にいまそかりけるふちはらのつねゆきと申すいまそかりてかうのをはるほとにうたよむ人くをめしあつめてけふのみわさを題にて春の心はえあるうたゝてまつらせたまふ右のむまのかみなりけるおきなめはた

かひなからよみける

山のみなうつりてけふにあふ事ははるのわかれをとふとなるへし

とよみたりけるをいま見ればよくもあらさりけりそのかみはこれやまさりけむあはれかりけり

（学習院大学蔵本・七一オ―七二ウ）
この章段に関しては、かねてよりとりわけ史実との不整合をめぐって議論のあるところであり、近年では、中野まゆみ「伊勢物語七七段「安祥寺での多賀幾子法要」存疑——「田邑帝の女御」は藤原古子か——」（『国文学研究』第百八集、平四・一〇）が、綿密な歴史考証を基盤に、安祥寺での多賀幾子法要は実際にはありえなかつたと論じて、「たかきこ」という本文の非本来性を指摘するに至っている。本文の流動までをも射程に入れた中野論文の推定は、その意味でもはなはだ興味深いものといえるのだけれども、本稿が〈誤写〉の存在を疑うのは、とりあえずその部分ではなく、傍線部

「山もさらに」という箇所なのである。以下においては、この本文の不合理を暴き、〈誤写〉説の観点からその〈復原〉を試みたいと思う。

二

問題箇所を含む「山もさらに堂の前に動き出でたるやうになん見えける」の部分、近・現代の『伊勢物語』諸注⁽³⁾はいったいどのよう⁽³⁾に解釈してきたのであろうか。まずその点を調べてみると、ほとんどの注釈書が、

○新規に山が堂の前に動き出したやうに見えました。

(『活釋』・口訳)

○山が新たに堂の前へ動いて出て来ているように見えたことである。

(『評釈』・釈)

○まるで山のように、それもいま新たにその山が堂の前に動いて出てきたように見えたのであった。

(『全集』・口語訳)

○(あらたに森ができたやうで)まるで、山でもあらたに堂の前に動いて現われたように見えたのだった。

(『講談社文庫』・現代語訳)

○まるで山が新たに堂の前に動いて出て来ているように見えたのだった。

(『全対訳』・口語訳)

○(それはまるで)山でも新しくお堂の前に動き出して出現したように見えたのだった。

(『角川文庫』・現代語訳)

○山が新しくできてお堂の前に動き出してきたように見えたのだった。

(『旺文社文庫』・現代語訳)

というふう⁽³⁾に訳していて、こうした解釈が今日の通説になっていることが判明する。

しかしながら、この〈通説〉は実のところたいへんに疑わしいのである。その第一の問題点は、なによりも副詞「さらに」の処理のしかたにある。諸注、このことばの当該文脈における語義を説明して、「さらに」は、新たに「『評釈』・語釈／中野・春田『全集』・語釈」、「さらに」は、あらたに、の意「『講談社文庫』・補注」と断定するものもあれば、「さらに」は「あらたに」の意かという「『精講』・語釈」、「あらたに、の意であろう」(『全対訳』・脚注)とやや距離を置くものもあるが、いずれにせよ、まずはこれが誤りなのだ。理由はきわめて単純である。すなわち、「さらに」という語を「新たに」とも訳せる可能性が生じるのは、以前に少なくとも一度は起こった行為や現象が、再度現われることをいう文脈に限定されるはずだからだ。そこにはじめて新しい山が出現した、まるでそのように見えたという場合、まずもってそれを「さらに」と表現することはない。

不要な手づきかとは思いうが、念のためにたまたま手もとにある古語辞典の語義分類のありかたとその用例に則して、このことを確認しておこう。たとえば、大野晋・佐竹昭広・前田金五郎編『岩波古語辞典』(第二刷、昭五〇)が、「①あらたに。事新しく」の用例としてあげる『万葉集』巻第十一の二四一七番歌、

・石上布留の神杉神さびて恋をもわれはさらにするかも
は初恋の歌などではむろんなく、この人物がすでに幾度となくしてきた恋をまたしても体験することだ、という意の一首。またたとえ

ば、井上宗雄・中村幸弘編『福武古語辞典』（初版第七刷、平二）が、
②改めて。再び。新たに」の語義のもとにかける『竹取物語』の
一節、

・さらに、夜さりこの寮にまうで来。

は、かぐや姫を得るために是が非でも「燕の子安貝」を手に入れた
一心の石上中納言麻呂足が、計略をもちかけてきた大炊寮の官人
倉津麻呂に対して命じたことばだけれども、これとて、いったん退
去のち夜分あらためて出参せよとの意にほかならない。さらにも
うひとつ、編者代表鈴木一雄『三省堂全訳読解古語辞典』（第一刷、
平七）が、「①新たに。改めて」の義に分類する『源氏物語』夕顔巻
の一条、

・何か、さらに思ほしものせさせたまふ。

の場合も、現代語に置き換えるならば、思つても甲斐のないことを
今さらといったニュアンスなのだ。

だからこそ、同じ箇所を次のように訳出する立場もあるのだろうか。

○山もあらためて堂の前へ動き出してきたように見えたことだつ
た。
（『ノート編』・口訳）

○木の茂った山が、改めて堂の前に動いて出てきたように見えた。

（『全訳注』・現代語訳）

これらは、「さらに」を「あらためて」の意に解している点、つま
り、語の解釈のレベルでは無難なのだが、今度は文意のうえで致
命的な不都合が生じることになる。なぜならば、「あらためて」とい
う以上、それ以前に存在した山に加えて、もしくは、かつて出現し
たことのある同じ山が再び、といったような意味あいにはか断じて

受け取れないはずであつて、当面の文脈にそぐわないことは明白な
のだから。これはまさしくジレンマだ。とするならば、「さらに」と
いう現行の本文じたいがそもそものかしらわだかまりを孕んでい
て、そのために釈然とした解釈の成立が阻まれているという可能性
もじゅうぶん考えられてくるのではなからうか。

なお、中村幸彦・岡見正雄・阪倉篤義編『角川古語大辞典』第二
巻（初版、昭五九）の「さらに」の項目を見ると、『伊勢物語』の当
該例が「⑤事柄が完全に実現するさま。また、状態が完全に実現し
ているさま。すっかり。まったく。完全に」の義の筆頭に置かれて
いて注目されるが、結論としてはやはり認めがたいように思う。第
一、安祥寺の本堂の前に参会者たちが捧物をつけて立てた無数の木
の枝を指して、山もお堂の前にすっかり姿を現わした、あるいは、
山もお堂の前に完全に動き出たように見えた、というのでは相変わ
らず文意不明瞭を免れないし、この語がわざわざ用いられた必然性
にも説明がつかないはずだ。私見によれば、副詞「さらに」が上記
のような意味に解せるのは、ある動作・状態の消失や終息を強調し
て叙述する場合、ないしは、日本大辞典刊行会編『小学館日本国語
大辞典』第五巻（縮刷版第一版第十一刷、平一）の説くとおり、「あ
まり好ましくなく名譽でない一つの事実が、決定的に完全に成立す
ることを認める肯定の気持を表す」文脈にかざられるものと思われ、
具体的にあげるならば、

・ひと寺もとめさすれど、さらに逃げて失せにけり。

（『大和物語』第百六十八段／日本古典文学全集・四二三頁）
・御返りごと書きて参らせむとするに、この歌の本、さらに忘れ

たり。

（三）卷本「枕草子」「殿などのおはしまさでのち」の段／新版角川文庫―下・三五頁）

などの例がまさしく該当するわけである。これらのケースと、当面の「山もさらに堂の前に動き出でたるやうになん見えける」とをあらためて比較するに、相互の質的差異は歴然としており、両者を同列に判断することはやはり不当だといわざるをえまい。

加えて、第二の問題点は、係助詞「も」の落ち着きの悪さにある。つまり、傍線部前後の本文に期待されているのは、「人々ばかりか山までも堂の前にせり出して来たように見えた」（『評解』・口訳）といった脈絡ではなく、あくまで、「そこばくのささげものを木の枝につけて、堂の前に立てた」、そのありさまそのものを形容して、まるで山が「動き出でたるやうになん見え」という意味上の連繋であるはずだから、「も」＝「までも」とあるのはいささか不自然に感じられるのである。かりに助詞を介在させるとすれば、ここは「山も」ではなく、むしろ「山の」とあるべきところではないだろうか。それかあらぬか、先にかかげた諸注の現代語訳を見ても、係助詞「も」の機微をまったく無視して、単に「山が」と訳出しているものが少なくないのは、このさい象徴的現象だと評せらるう。

このように、「さらに」のみならず「も」までもがあやしい。となれば、ここはひとつ、傍線部本文「山もさらに」に関して何らかの（誤写）の存在を疑ってみる価値があるのではなからうか。そうした見地から、次節では大胆な本文改訂案を提示し、その妥当性の証明に努めてみたい。

三

さて、ここで提示したい本文改訂案とは、要するに、「山も」の「も」は「こと」二字からの転訛であって、傍線部本文は「山もさらに」ではなく、もともと「山ことさらに」だったのではないか、というものである。「こと（已止）」の仮名連綿二文字が「も（毛）」一字に誤られること、あるいはその逆も、別段めずらしい現象ではないので、はじめに（誤写）じたいの一般的な可能性についていえば、じゅうぶんに認められてよからうかと思われる。今、具体例をひとつだけ示しておくならば、『蜻蛉日記』下巻、天禄三年三月の記事、

かくのみうくおほゆるみなれはこのいのちをゆめ許おしからす
おほゆるこのそのいみともははしらにをしつけてなとみゆるこ
そも（毛）しもおしからんみのやうなりけれ

（宮内庁書陵部本・一五才）
にみえる傍線部「もしも」などはその好例で、ここは明らかに「ことしも」の誤りだと断定できる箇所なのである。

残る問題はしたがって、「ことさらに」ということばをあえて原形に想定することによって、『伊勢物語』第七十七段の当該文脈の流れが従来とくらべてどのように円滑かつ合理的なものへと変貌するのか、その点についての説明ということになるだろう。

そこでまずは、形容動詞「ことさらに」の語義である。このことばの連用形「ことさらに」は、文脈によって、「わざと、故意に」の意に解するのが適当な場合もあるが、今必要なのは、「わざわざ、

特別に」といった語義をもつて解釈するのがふさわしいケースなのであり、それにはたとえば、次のごとき用例が該当しよう。

①壬生忠岑、御供にあり。御階のもとに、松灯しながら膝まづきて、御消息申す。

「鶴の渡せる橋の霜の上を夜半に踏みわけことさらにこそとなむのたまふ」と申す。

②『大和物語』第百二十五段／日本古典文学全集・三六〇頁）
②年ごろをかくて過ぐし侍りつるを、たよりにこのわたりに、な

どうけたまはりて、かしこまり申しつるを、ましてことさらにうけたまはれば、とり申すかぎりにあらず、かしこまり申し侍る。

③『うつつほ物語』吹上上巻／古典文庫・四七五頁）
③「今日のは、ことさらに」とて、殿の御方より禄は出ださせ給ふ。

女の装束に紅梅の細長添へたり。

④『三卷本『枕草子』「関白殿、二月二十一日に」の段／新版角川文庫一・下・一二六頁）

①は、「泉の大将」と藤原定国が藤原時平邸をとある夜更けに突然訪問した折、お供をしていた壬生忠岑が「御消息」を披露して時平の心を動かしたというエピソードだが、一首の結句「ことさらにこそ」はわざわざ参上した、の意。②は、吹上の地を訪れて宮中への出仕を格別に慇懃した、源仲頼のことばに対する涼の返答。そして③は、今日の使者は特別に処遇すべし、という関白道隆の意向である。

さらに、以下に示すとおり「ことさらに」が助動詞「やうなり」と呼応する例が散見されるのも、私見にとつては心強い材料といえ

るかもしれない。

・格子のつばなどに、木の葉をことさらにしたらむやうに、こまごまと吹き入れたるこそ、荒かりつる風のしわざとはおぼえぬ。
③『三卷本『枕草子』「野分のまたの日こそ」の段／新版角川文庫一・下・八〇頁）

・物語に、ことさらににつくり出でたるやうなる御ありさまなり。

④『源氏物語』賢木巻／日本古典文学全集一(2)・九六頁）
・秋の夜の限なき月には、よろづのものにとどこほりなきに、琴笛の音も明らかに、澄める心地し侍れど、なほことさらににつくりあはせたるやうなる空のけしき、花の露もいろいろ目移ろひ、心散りて、かぎりこそ侍れ。

⑤『源氏物語』若菜下巻／同(4)・一八六頁）
・いささかひきもつくろはぬ額髪は、ことさらにひねりかけたらむやうに、こぼれかかりて

⑥『夜の寝覚』巻一／日本古典文学全集・一三九頁）
では、以上を踏まえて、傍線部を改訂した場合の、その前後の本文のありさまを眺めてみるとどうであらうか。

そこばくのささげものを木の枝につけて、堂の前に立てたれば、山ことさらに堂の前に動き出でたるやうになん見えける。

現行の本文「山もさらに」では従来釈然としなかったこのあたりの文脈が、「山ことさらに」であれば、一転して判然とするのは明らかであらう。すなわち、

たくさんの捧物を木の枝につけて、お堂の前に立てたので、（そのありさまはまるで、本物の）山が（亡き女御の死を悼み、こ

の日の法要に参列するために」わざわざお堂の前に移動してき
たかのように見えたのだった。

という意味の文章に解せて、なんら抵抗がなくなるわけだ。いな、
そればかりか、「山がわざわざ」と、擬人化された「山」の意志性が
明瞭にうち出されることによって、この日「右の馬の頭なりける翁」
が「目はたがひながら」詠んだ歌、

山のみな移りて今日にあふことは春の別れをとふとなるべし
の内容とも、より緊密に響きあうことになるのではなからうか。

四

ところで、ひとり『集成』は、問題箇所「さらに」の横に「こ
とさらに」という傍訳を施していてもいい。現本文に拠ってい
ながら、右に開陳した私案と結果的に等しいと考えられる読みが存
在していることは、このさい実に暗示的である。だが、ほんとうに
「さらに」を「ことさらに」の意に解することが許されるのかどうか、
その点ははなはだ疑問というべきだ。そうした用例は、ほかには見
あたらないのではないかと思われるからである。

このことに関連して、『伊勢物語』（天福本）の中にはもうひとつ、
解釈の定まらない「さらに」があることに触れておかなければなら
ないだろう。それは、次の第八十一段の例である。

昔、左の大臣いまそかりけり。賀茂川のほとりに、六条わたりに、
家をいとおもしろくつくりて住み給ひけり。神無月のつご
もりがたに、菊の花うつろひ盛りなるに、紅葉のちくきに見ゆ

るをり、親王たちおはしまさせて、夜ひと夜酒飲みし遊びて、
夜明けもて行くほどに、この殿のおもしろきをほむる歌よむ。
そこにありけるかたる翁、板敷きの下にはひありきて、人にみ
なよませはててよめる、

塩竈にいつか来にけむ朝風ぎに釣する舟はここに寄らなむ
となむよみけるは、陸奥に行きたりけるに、あやしくおもしろ
きところどころ多かりけり。わがみかど六十余国の中に、塩竈
といふところに似たるところなかりけり。さればなむ、かの翁
さらにここをめでて、「塩竈にいつか来にけむ」とよめりける。

この段の「塩竈に」歌よりあとの部分をどのように理解すべきか
をめぐっては、従来さまざまな説があるところだが、傍線を付した
「さらに」の解釈に関しても、今日なお一致した見解が得られてい
ないのが現状なのだ。ところが、ここできわめて不可解なのは、こ
ちらの「さらに」については、『集成』がやはり「ことさらに」と訳し
ているにとどまらず、『講義』、『大成』、『口譯』、『評釈』、
西下『新解』、『評解』等が「ことさらに」、狩野尾・中田『新解』、
『角川文庫』、『旺文社文庫』等が「ことさらに」、『精講』、森本『全釈』
が「とりわけ」、鑑賞が「特に」というように、数多くの注釈書
がこの方向で解釈している事実なのである。しかも、これら諸注の
うち、なぜ「さらに」が「ことさらに」の意に解し得るのか、その
根拠を明示するものは一書として見あたらず、ましてや、他の確例
を援用してその正当性を裏づけようとするものも皆無なのは、いっ
たいどうしたことだろう。

こうした場合、事情はたいいふたつのうちのどちらかだ。つま

り、それがわざわざ根拠を説明する必要もないほどに自明な事柄に属しているか、あるいは逆に、それが根拠を示しえないはなはだ氣分的な解釈であるか、のいずれかなのだ。そしてこの場合、事実はおそらく後者だとみてよい。なぜなら、第八十一段の「さらに」には、このことばのきわめて一般的な語義「あらためて。かさねて、もしくは「ますます。一段と」を充当させてみて、前後の脈絡に何の不都合も生じないわけだから、そこへ通常は考えられない訳語「ことさらに」等をあえて持ち出してくる必要は毫もないと判断されるからである。

思うに、こうした理解に苦しむ解釈の水脈は、藤井高尚の評言、○さればなん云々とは、六十余国に似たる所なければ、かの翁もまことのしほがまのうら也と思ひたるよしにて、いつかきにけんとよめるは、ことさらにこゝをめでゝの事也と記者はいへる詞也。
(『伊勢物語新釈』⁵)

あたりをおそらくは淵源として、肝腎な語義の吟味を置き去りにしたまま、たぶん情緒的かつ惰性的に今日まで命脈を保ってきたにすぎない、というのが真相なのではあるまいか。

与えられた本文が「さらに」である以上、それを「ことさらに」と同義に解くことはまず許されなはずだ。そして、こと第八十一段に関しては、述べたように、この語のスタンダードな語義でもつてそのまま決着がつけられるのに対し、第七十七段のケースがそれと同じでないことは、ひるがえってみるに誰の目にも明らかではないだろうか。

五

「ことさらに」本文を改訂する必要がどこにあるのか、まったくもって理解しがたい。『伊勢物語』(天福本)第七十七段の問題箇所とやらは一読して文意明瞭、現本文のままでじゅうぶんに筋が通っているではないか。——ということが、これを契機にもしも再確認されるのであれば、もとより本望というべきである。けれども、その場合には、なにゆえ「山も」であるのか、また、なにゆえ「さらに」であるのか、係助詞「も」の機能および副詞「さらに」の語義双方について、文脈上の必然性が明確に説明されなければならないのはもちろん、同時に、第七十七段全体の流れ、とりわけ翁の歌との整合性にじゅうぶんな配慮が要求されることもいうにはおよぶまい。

そして、少なくとも現時点における私見は、右のごとき平和的解決の可能性に対してどうしても否定的にならざるをえないために、本稿では、あえて現行の本文、

山もさらに堂の前に動き出でたるやうになん見えける。

を、すでに述べた種々の見地からして、

山ことさらに堂の前に動き出でたるやうになん見えける。

に〈復原〉すべきではないかと、そのように提案してみたわけである。

注

(1)

ちなみに、同論では、

多賀幾子の名が記された理由は不明と言わざるを得ないが、ここでは、同じく「翁章段」の八一段が「左のおほいうまぢぎみ」とだけ言つて源融の名まで書かず、同七九段でも「むかし、氏のなかに親王生れたまへりけり」と貞数親王の名を出さずに始めているように、七七段でも元来は女御の名前までは記されていなかったのに、常行の名にひかれてその姉の多賀幾子の名があてられたものではないか、と推測するにとどめる。

と述べられている。

(2)

同様の視点からすでに発表した拙稿には、「伊勢物語」誤写の論——第六十七段の場合——（『文学・語学』第百三十九号、平六・二）、「みこのほいなし」考（『解釈』第四十一巻第二号、平七・二）、「伊勢物語」誤写の論——第五十八段の場合——（『国語国文』第六十四巻第十一号、平七・一一）がある。また、最近の論としては、第四十六段の本文について、「人の国」へと下つた親友からの手紙文の末尾部分がもとは独立した和歌であつた可能性を考証した、迫徹朗「歌のゆくえ——『伊勢物語』四十六段をめぐって——」（『尚絅大学研究紀要』第十七号、平六・二）や、この見解を積極的に支持して補強を図る、妹尾好信「世の中の人の心は目かるれば……」追考——『伊勢物語』第四六段贈答歌の痕跡——（『古代中世国文学』第七号、平七・八）などが注目さ

(3)

れる。

本稿において引用した近・現代の注釈書とその略称は以下のとおりである。今泉定介『伊勢物語講義』（誠之堂書店、明二六）↓『講義』、小林榮子『伊勢物語活釋』（大同館書店、大五一）↓『活釋』、新井無二郎『評釈伊勢物語大成』（代々木書店、昭六）↓『大成』、佐佐木弘綱・佐佐木信綱「口譯伊勢物語」（人文書院、昭一五）↓「口譯」、池田亀鑑『伊勢物語精講』（學燈社、昭三〇）↓『精講』、窪田空穂『伊勢物語評釈』（東京堂出版、昭三〇）↓『評釈』、西下経一『伊勢物語新解』（明治書院、昭三三）↓『西下新解』、上坂信男『伊勢物語評解』（有精堂、昭四三）↓『評解』、折口信夫全集・ノート編第十三巻（中央公論社、昭四五）↓『ノート編』、狩野尾義衛・中田武司『伊勢物語新解』（白帝社、昭四六）↓『狩野尾・中田新解』、森野宗明『講談社文庫・伊勢物語』（講談社、昭四七）↓『講談社文庫』、福井貞助『日本古典文学全集・伊勢物語』（小学館、昭四七）↓『全集』、森本茂『伊勢物語全釈』（大学堂書店、昭四八）↓『森本全釈』、片桐洋一『鑑賞日本古典文学・伊勢物語』（角川書店、昭五〇）↓『鑑賞』、渡辺実『新潮日本古典集成・伊勢物語』（新潮社、昭五一）↓『集成』、永井和子『全対訳日本古典新書・伊勢物語』（創英社、昭五三）↓『全対訳』、阿部俊子『講談社学術文庫・伊勢物語全訳注』（講談社、昭五四）↓『全訳注』、石田稜二『角川文庫・新版伊勢物語』（角川書店、昭五四）↓『角川文庫』、中野幸一・春田裕之『伊勢物語全釈』（武蔵

(4) 野書院、昭五八) ↓中野・春田『全釈』、中野幸一『旺文社文庫・伊勢物語』(旺文社、平二) ↓『旺文社文庫』

池田龜鑑『伊勢物語に就きての研究・校本篇』(有精堂、昭三五再版)によれば、古本系統の最福寺本では「山のさらに」とある(一九四頁)。なお、『講談社文庫』は、補注において「真名本「山師毛(山しも)」。その方がわかりやすい」と述べている。

(5) 引用は、竹岡正夫『伊勢物語全評釈』(右文書院、昭六二)所収の文政版本翻刻に基づく。

(ことう やすふみ・北大助教授)